英国における桟橋と海岸リゾート開発に関する研究

八尋 明彦*

＊（一財）沿岸技術研究センター 審議役

1.　研究の背景と目的

英国の海岸リゾートには，他国に例を見ない数多くの鉄製の桟橋(Piers)がある．これらは，産業革命により英国経済が成熟した 1800 年代のヴィクトリア王朝時代に，海岸リゾートの開発とともに競うように建造されたものである．全国各地に 100 基近くが建設されたが，その後の老朽化，波浪や火災などにより多くが消失し，今日 58 基が現存している．

Piers 研究会と（一財）沿岸技術研究センター（CDIT），（一財）みなと総合研究財団（WAVE），及び（一財）港湾空港総合技術センター（SCOPE）は，以下に示す項目について英国桟橋調査を実施し，その後共同で研究を行った．

① 英国における海岸リゾートの発展と桟橋建設の歴史的な変遷
② 重要な桟橋の歴史と現状
③ 今日の海岸リゾートの利用と桟橋の果たしている役割
④ 桟橋運営の維持保全に関する体制と課題
⑤ 我が国の沿岸域における海岸リゾート形成への示唆

なお，英国の桟橋についての情報は，井上聡史氏（前国際港湾協会（IAPH）事務総長，現政策研究大学院教授）の永年にわたる英国桟橋に関わる出版物や資料の収集を通じて得られたものである．

2.　英国桟橋調査

（1）調査団

団　長：古土井　光昭　PEN 代表　Piers 研究会会長
副団長：柏原　英郎（公社）日本港湾協会　名誉会長
顧　問：井上聡史　政策研究大学院大学教授
顧　問：Richard Wiltshire　ロンドン大学教授
団　員：加藤　寛　北海道大学大学院
　　国際広報メディア・観光学院
　　：八尋　明彦　（一財）沿岸技術研究センター
　　審議役
　　：黒田　隆明　（一財）みなと総合研究財団
　　主任技師
　　：大野　正人　（一財）港湾空港総合技術センター
　　研究主幹

（2）調査日程

今回の調査団で調査した桟橋と訪ねた都市，並びに英国の主要な桟橋は，図-1 に示す．表-1 は，現地調査日程である．この日程については，Wiltshire 博士や英国桟橋協会（National Piers Society）の広報担当 Anthony Wills 氏に貴重なアドバイスをもらった．今回の現地調査が事故もなく進捗できたのは,Wiltshire 博士のさまざまな指導や助言によるものであり，心から感謝を捧げる次第である．

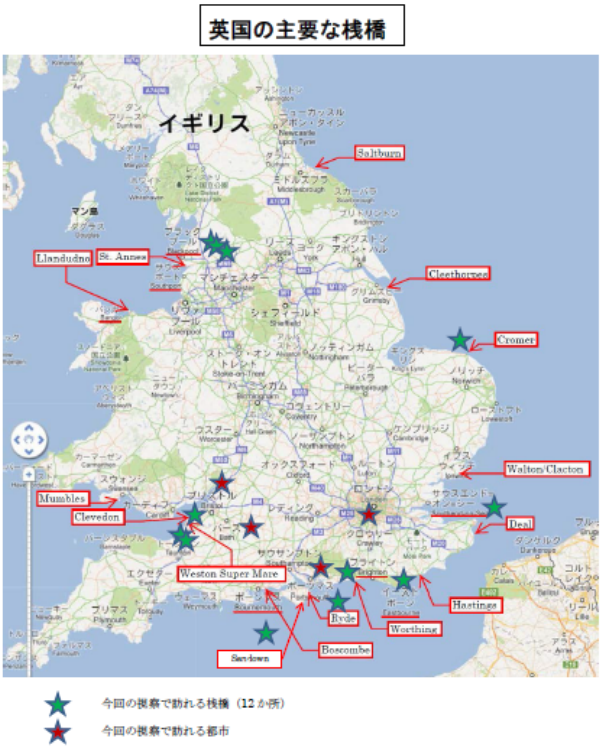
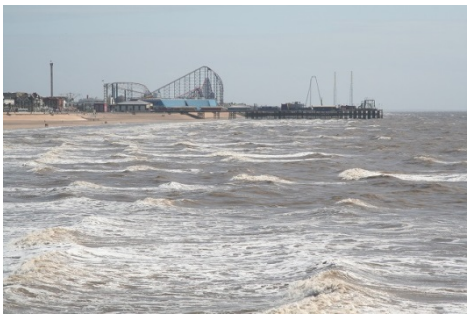
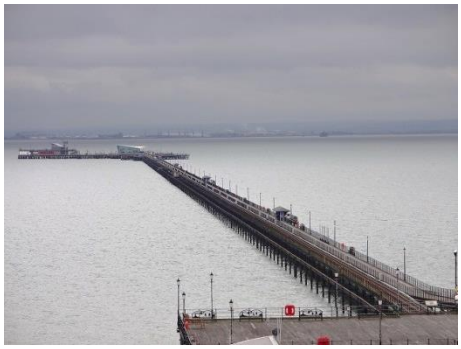


図-1　調査対象桟橋と都市

表-1　現地調査日程

期　　日	主　な　行　程
平成 25 年 6 月 26 日（水）	成田空港　11:45 発　JL401 ロンドン・ヒースロー空港　16:20 着
6 月 27 日（木）	＜英国の海浜リゾート発祥の地ブライトン＞ ブライトン・パレス桟橋の視察　　イースト・ボーン桟橋の視察
6 月 28 日（金）	＜ビクトリア女王が好んだリゾート島　ワイト島＞ ライド桟橋の視察　　サンダウン桟橋の視察 （Google earth より） ポーツマス・ドックヤード歴史館の視察
6 月 29 日（土）	＜ローマ時代から栄華を誇った温泉地バース，古の海賊の町ブリストル＞
6 月 30 日（日） 6 月 30 日（日）	＜英国西部の海岸と桟橋＞ ウェスト・スーパー・メア・グランド桟橋の視察　バーンベック桟橋の視察 クレブドン桟橋の視察 ●共同所有者や桟橋保存財団関係者へのヒヤリング

７月１日（月）	＜英国初の大衆海岸リゾート地　ブラックプール＞ ブラック・プール・ノース桟橋の視察　ブラック・プールセントラル桟橋の視察 ブラック・プール・サウス桟橋の視察  ●桟橋所有関係者へのヒヤリング
７月２日（火）	＜英国東部海岸のリゾート地　クローマー＞ クローマー桟橋の視察
７月３日（水）	＜英国で古く，かつ最長の桟橋＞ サウスエンド桟橋の視察  ●英国桟橋協会関係者へのヒヤリング
７月４日（木）	ロンドン・ヒースロー空港　19:35 発　JL402
７月５日（金）	成田空港　15:20 着

3.　今後の研究課題

英国の桟橋は海岸に建設された単なる構造物ではなく，英国の歴史や文化，経済，社会を色濃く反映している．したがって歴史も風土も異なるわれわれが英国の桟橋の全体像を正しく理解し，そこから何かを学び取ることは決して容易ではない．今回の調査を通して議論を重ねてきた主要な課題は，以下の通り．

(1) 英国人が海や桟橋をこれほど愛する理由とは何か．

英国人にとって海とはどのような存在であり，どのような意味をもつものなのであろうか．同じ島国ではあるが，海に対する英国人の愛着や志向は日本人と大きく違うように感じられる．高く急峻な山岳地帯をもたず遠浅の海岸に囲まれた地理的条件(決して年間を通して静穏だとは云い難いが)も影響しているのかもしれない．また英国の桟橋への愛着には，海を渡ることの意味を教義の中で説くキリスト教（マタイによる福音書 14 章 22 節以降）に由来する宗教的な背景がないだろうか．

(2) 桟橋は社会から隔離された特殊な空間なのではないか．

長い歴史を経てきた桟橋は，その利用や位置づけにおいて，それぞれの時代の社会の特殊な空間であった可能性がないだろうか．桟橋の誕生そのものが貴族や上流階級の一部の人々だけにその利用が許された空間であった．その後の大衆化の過程においても，普段の生活とは違う祭りのような興奮と非日常性の高い特殊な空間であった．現代においても，海の上を歩く解放感や非日常性を提供するとともに，桟橋の利用には一般の市街地では立地させにくいような活動や施設を受け入れている傾向があるのではないだろうか．

(3) 鋳鉄製の杭による桟橋形式をなぜ選択し，その後も選択し続けるのか．

当時すでに石積みの港湾施設は英国で建設されていたにもかかわらず，何故，海岸リゾートの桟橋には鋳鉄製の杭式構造を採用したのであろうか．干満差が大きい英国海岸の特徴を活かし陸上施工が可能であり，また当時の鉄道開発で育った鉄橋技術を応用して杭式の桟橋が建設されたとしても，すべての桟橋が例外なく杭式桟橋となったのは何故であろうか．さらに被災するたびに再建する桟橋に新しく別の構造形式を採用せず，杭式の構造を取り続けてきた理由は何であろうか．

(4) 桟橋建設に要する資金を誰がどのように調達したのか．

海岸リゾートの開発は当時の地域振興でもあった．しかも桟橋の多くが投資の対象として建設されたと云われる．実際にかなり高率の配当を重ねた成功事例も少なくない．そうした桟橋事業において地域のリーダーとしての貴族の果たした役割はなんであったのか．産業革命期の英国ではターンパイク道路や運河の建設などにおいても，社会の旺盛な需要に応えて貴族や上流階級が積極的に投資した．これら交通インフラへの投資と桟橋への投資は，本質的に同じ動機や意図によるものであったのか，異なるのか．地元地域の発展に責任をもつという貴族にとり，事業への投資はどのような位置づけであったのだろうか．また今日の桟橋の経営者（公共，民間）にとって，桟橋事業への投資とはどのような意味をもっているのであろうか．

(5) 歴史遺産としての桟橋を執拗に保全し続ける背景に何があるのか．

英国の桟橋は例外なく暴風波浪や火災などの被災をたびたび受けてきた．しかしその都度，英国人が諦めずに苦労を重ねて資金を集め再建を続けてきた理由は何故だろうか．英国人がこれほどまでに歴史的な桟橋の保全にこだわる理由をどのように理解すればよいのか．近年の環境問題に対する関心の高まりの中で，欧米社会に強く流れ共有されるスチューワドシップ(Stewardship)と云う概念と何か関係があるのではないか．さらにその背景には，キリスト教（創世記 1 章 27 節以降）が教える万物への配慮や庇護と云う人間の使命と関係があるのではないだろうか．

(6) 桟橋の維持，運営にボランティア活動が盛んな背景は何か．

消滅の危機にある多くの桟橋の保全や現存する桟橋の運営に，市民ボランティアが大きな役割を果たしている．また桟橋の再建や保全に中央政府からの補助支援を当てにしない自主独立の姿勢が極めて強いように思われる．こうしたボランティア活動や草の根運動がどのように発展してきたのであろうか．これからも変わらずにボランティア中心の活動に依存していくことができるのであろうか．

(7) 時代の変化に歴史遺産を馴染ませながら発展させることができるか．

現存する桟橋を分析すると，歴史的遺産としての桟橋を嘗てのままに存続させる流れと，時代の変化に呼応させながら存続させる流れがあるように思われる．とくに後者は日本の歴史遺産の保全の考え方とは大きく異なる．当時の様子を出来る限り存続させながらも，時代の変化に桟橋をあわせて変化させると云う具体的な事例にはどのようなものがあるか．それぞれのアプローチに強みや限界はどんな点があるのか．われわ

れが学ぶべき点は何か.

(8) 投資を抑えて桟橋を建設，管理，運営する姿勢に何を学ぶべきか.

英国の桟橋の運営は，最悪の自然条件にも耐えるよう施設投資をするのではなく，最小限に投資を抑え，自然条件が危険になれば桟橋を閉鎖するなど利用を管理することで，運営の経済性を確保しているように思われる．また鋳鉄製の杭の錆びにくさが功を奏し，完成から時を経るごとに桟橋の歴史的な価値を高めている.こうした時間とともに劣化するのではなく,逆に価値を高めるような建設素材の開発が重要ではないか.さらに度重なる被災を乗り越える上で，桟橋にかけられた保険が重要な役割を果たしているものと考えられる．このあたりについても学ぶところが多いのではないか.

(9) 今日の英国人は海岸リゾートをどのように利用しているのか.

これからの英国の桟橋を考えるうえで，現在の英国人がどのような休暇やレクリエーション活動を行い，その中で海や桟橋をどのように利用しているのかを理解することは極めて重要である．全国のマクロ的な状況を俯瞰的にとらえることが不可欠である．またその時間的な推移についても分析し理解を深めるべきである.

4.　おわりに

これからも英国のみならず世界の桟橋について調査研究を継続的に行うとともに，わが国の状況にふさわしい海岸リゾートのあり方を研究するため,Piers 研究会が本格的に設立された.この研究会が中心となり，英国の桟橋の実態に関するセミナーの開催，学会や関係団体の機関誌への論文投稿などを積極的に行われ，また英国桟橋協会（National Piers Society）との交流をさらに深められる．当研究会の最終的な目標は，日本における海岸リゾートのあり方を見直し，これからの時代にふさわしい姿を構想し，その中で日本型の桟橋の位置づけや可能性を明らかにすることされている．当センターとしても，我が国により 50 年近くも先行している英国の近代土木技術と 200 年近くの歴史を持つ英国桟橋を調査・研究することによって，今後の我が国沿岸構造物の設計や維持管理の在り方について研究を深めていきたい．なお，英国桟橋調査の詳細な内容は,「英国 Piers 調査報告書 2013」（４団体共著）に記す.